

視点取得能力の発達段階と対人不安が 解釈バイアスに及ぼす影響

○坂本千佳¹・楳本知子²

(¹東亜大学大学院総合学術研究科・²東亜大学人間科学部)

目的

視点取得能力とは、自他の視点の違いを認識し、他者の立場から他者の欲求や感情、思考や意図などを推し量り、社会的な観点で判断する能力である(安藤・新堂, 2013)。しかし、視点取得能力の高さが必ずしも社会的にふさわしい行動に結びつくわけではない(大対・松見, 2007)。

円滑な対人関係の構築を阻害する要因として、対人不安によって生じる解釈バイアスがある。曖昧な対人状況に遭遇したとき、対人不安の高い人はその状況を否定的に考えやすく、解釈バイアスを生じやすい(守谷他, 2007)。曖昧な対人状況において、対人不安の高い人は、視点取得能力の発達段階が高くとも解釈バイアスが生じやすいが、身体の不調などの非対人状況では、対人不安のレベルにかかわらず、視点取得能力が高ければ、解釈バイアスを生じにくいと推測される。

本研究では、場面想定法を用いて、対人不安と視点取得能力の発達段階が解釈バイアスに及ぼす影響について検討を行うことを目的とする。

方法

対象者：大学生 121 名 (男性 65 名, 女性 56 名)、平均年齢 20.12 歳 ($SD=1.47$)、年齢範囲 18-26 歳
質問紙：①フェイスシート

②中学生版社会的視点取得能力検査(荒木・松尾, 1992)：成人用の視点取得能力検査として利用できる(石川・内山, 2002)。アルメニア課題と 4 つの設問で構成されている。

③FNE の日本語版(石川・佐々木・福井, 1992)：対人不安を測定する一次元尺度。全 30 項目、2 件法、得点範囲 0~30 点。

④自己注目版場面想定法質問紙(守谷・佐々木・丹野, 2007)：対人状況と非対人状況の各々 3 つの場面に設定された肯定的・中性的・否定的の 3 種類の解釈について、それぞれどの程度当てはまるかを 5 件法 (1~5 点) で評定した。

結果

対人状況、非対人状況ごとに視点取得能力と対人不安、解釈の種類を独立変数、解釈得点を従属変数として男女別に分散分析を行った。

対人状況：男性の場合、解釈の種類の主効果のみが有意で ($F(2, 59)=5.28, p<.01$)、肯定的解釈得点が最も低かった。女性の場合、対人不安×解釈の種類が有意であった ($F(2, 50)=6.40, p<.01$)。下位検定の結果、対人不安高群では、肯定的解釈<中性的解釈<否定的解釈得点であった。対人不安低群では肯定的解釈得点が最も低かった (Figure1 参照)。

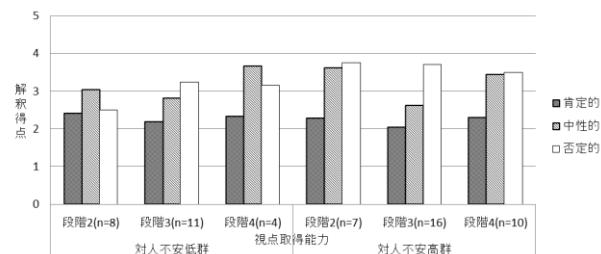


Figure 1. 対人状況における対人不安のレベルと視点取得能力段階別の解釈得点
- 女性の場合 -

非対人状況：男性の場合、解釈の種類の主効果のみが有意で ($F(2, 59)=17.89, p<.01$)、否定的解釈得点が最も低かった。女性の場合、対人不安×解釈の種類が有意であった ($F(2, 50)=6.52, p<.01$)。下位検定の結果、対人不安高・低群ともに否定的解釈得点が最も低かった (Figure2 参照)。

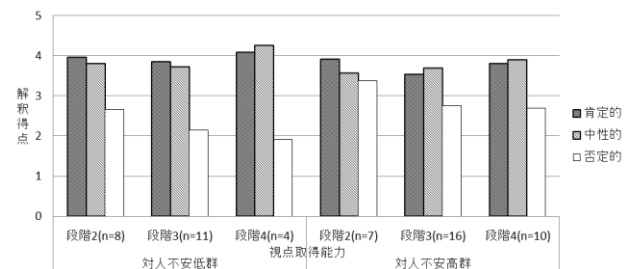


Figure 2. 非対人状況における対人不安のレベルと視点取得能力段階別の解釈得点
- 女性の場合 -

考察

本研究の結果より、対人状況に関する推測は男女ともに概ね支持された。一方、非対人状況に関する推測は男女ともに支持されなかった。その理由として、視点取得能力が対人関係でのみ発揮される能力であることが考えられる。本研究では視点取得能力の段階 3 の人数が最も多く、段階 2・4 の人数が少なかった。そのため高校生も対象にし、視点取得能力の発達段階による変化を検討することが必要であると考えられる。